

盗 奪 の 視 点

—— 経済学 の 原 罪 ——

大 門 一 樹

搾取・収奪と盗奪

社会的に不正や弱者救済の声もうすれ、そうした不正、弱者を生み出す大きな原因である独占禁止を強化せよという独禁法改正も財界の圧力で押しつぶされてしまった。

独占、独占価格とはなにか。それは比喩でもアレゴリーでもなく、掠奪に他ならない。

独占資本はその地位を利用して最大の利潤を得られるような価格を一方的に指令する。買手は不当な価格と知っても、値上げされても、買わねば生存・生活できない必需品の場合はやむなく買う。不合理価格、不当値上げとわかってこれに反対しても、結局は暴力で押し切られ、買わなければ生活に差しつかえるため払わざるをえない強制におしこめられているのが実情だ。電気、ガスなどの値上げ分不払い運動などでも、警官出動で圧迫されてやむなく支払われている。

これはあきらかに掠奪である。しかし大衆の側には錯覚があった、自己の意志で支払い、受けとるという形にとらわれて「買っ

た」と感覚する。掠奪者のとり立てにやむなく応ずることを「支払い」と思いこまされている。独占価格はちやうど、兇器をつきつけられて金庫を開けさせられるのと同じことであるが生命を失うよりは金を出した方がよいという判断があつてダイヤルをまわしたといえる。強制された意志であるが、「意志ぬき」ではない。ある種の「合意」がある。それが単なる掠奪でないという錯覚を与えるが、その錯覚の心理的原因の一つは、強盗は否応いわずに金が独占はいやなら買わなくてもよい、「自由意志」に任かすという形をとる。しかし買わなくては生きられないとすれば、実質は否応いわずなのである。もう一つの原因は、独占の掠奪者は金だけを奪って物を与えないのではなく、いくらかの物を与えることで過大の金を強奪するという手口である。これも単なる掠奪とはちがった感覚を与える。しかしこれが錯覚であることはいふまでもない。

一九六五年のロサンゼルス暴動で黒人が叫んだ。「警官とは何か、それは商品の行動的な奉仕者である。商品に完全に従属している。かれらの仕事は、与えられた人間労働の生産物がただの

冷蔵庫やライフフルとなることでなく、金を出して支払わねばならない商品、そうしたものとして止まることを確立することなのだ。無言の受動的な、無感覚な物体、それを利用して金を持ってやってくる最初の人に引き渡されてしまうことをたしかにするという仕事である」。

マルクスには「搾取」と「収奪」の二つの言葉がある。これをどう理解すべきかが問題にされた。

「搾取というのは：：労働力を商品として購入して剰余労働をとるんで、それは商品経済的には不法でも不正でもない」（宇野弘蔵氏函書新聞八九九号）。これがマルクス主義者の考え方であるが、マルクスでは靴の価値は価値法則でさまり、靴職人の賃金は靴の価値がきまったのと同じ法則でさまる。靴の価値とそれをつくる労働力の価値との差が靴資本の利潤となるということになっている。靴も賃金労働力の価値も等価交換、「正しい交換」で、市場の法則でさまる。

二つの価値の差引きにおいて残るものがあるということが搾取と名づけられているものである。こうした説明から「搾取は盗みではない」という発言も出てくる。搾取という文字感覚から連想されるような搾り取るという行動は何もなく、社会の自然の結果として搾取が成立しているということだ。

「収奪」ということばが搾取と混同されて使われることを避けようとするマルクス学者もある（金子ハルオ氏「経済」七号）。「搾取とは経済的な方法で他人の不払い労働を取得すること。収奪とは経済外的な方法で他人の不払い労働を取得することという意味にも用いられている」。「搾取とは他人の労働をタダで手に入

れることを意味する」「収奪は私有財産、あるいは端的には生産手段を奪いとることである」。

そこで「独占資本が労働者を激しく搾取し収奪している」といっては誤りで搾取があるのみだという。しかし、独占資本が中小企業を「搾取し収奪する」ということはいえるとしている。なぜなら、独占資本は下請け系列化や独占価格の機構などを通して中小企業の労働者や農民の労働の一部をタダで手に入れているとともに、他方では貸付金の抵当などとして、零落した中小資本家や農民の所有する資本や土地をうばいとり、併合してゆくからである。

このように搾取と収奪の異同をあきらかに区別している。

「搾取」——他人の労働のタダとりが価値どおりの等価交換にもとづく結果で、「商品経済的には、不法でも不正でもない」の言葉をどう理解すべきか。

労働者は「搾取されている」と表現されるその労働者の賃金すなわち労働力の価値の決定「法則」について何がいえるか。

J・A・シュンペーターは、資本主義の労働市場においては、労働者は強奪され欺瞞されているということとを、あるいは、労働者のもつあわれむべき弱みのために、与えられた条件をなんでもそのまま受けとらざるをえないのだ、と主張する通俗のスローガンをマルクスは避けた、という。「ことがらはそれほど簡単ではない、というのは、労働者は自己の潜在的労働の全価値を受けとっているからである。」

また、「賃銀契約における取引力や詐欺に関する普通のスローガンは、どれ一つとしてマルクスを満足させなかった。マルクス

が立証しようとしたものは、搾収が、個々人の立場から見ても、時々偶然に生じたものではなくて、不可避免的に、かつ個々人の意志とは全く無関係に、資本主義体制の論理そのものによってたらされるということであつた。

シュンペーターの強調がどれほどの真実性をもっているのか。労働力の価値はどのようにしてきまるか。資本論の文脈に即して検討してみると、シュンペーターが否定した労働者は強奪され欺瞞されているという事実につき当らざるを得ないのである（これについては『月刊総評』二一—一に書いた）。

欺瞞と暴力—盗奪の分析

独占の掠奪は暴力によるが、しかし資本は暴力だけでなく欺瞞によって盗奪の目的を達することができる。むしろ欺瞞によらなければ盗むことができない場合が多い。

商品の場合、資本が資本の生産装置のなかで生産した製品はつぎに広告、販売機構、セールスマンなどから流通過程で問屋、小売店にマージン、リベート、援助費その他を与えることで全国的に買手を操作する欺瞞装置のなかに置く。マスコミ、評論家、デザイナー、専門学者なども動員して商品でなく虚構のイメージを売る。こうして価格も品質もフィクション化する。そのメカニズムについてはすでに度々レポートした（最近のものは『現代の眼』二月号）商品が生産装置とともに欺瞞装置のなかに入れられる。独占資本は生産そのものに要した労働量の五倍、十倍の労働量をこの欺瞞装置に投入することで高い独占価格を実現することがで

きる。

商品是这样して幻想のなかにおとしこむ欺瞞装置のなかで商品価値を実現する。こうみてくると資本は土地、労働とともに生産の三要素という考え方は適切でなくなる。資本による工場のなかでの生産は生産物の生産にみえても実は「欺瞞の材料」あるいは部品の生産にしか過ぎない。資本の欺瞞装置のなかに入れられて商品としての生産は完成する。そして、その「価格」がつくり上げられる。

もっとも欺瞞装置に入る前に生産そのものの過程で欺瞞を背負った製品として工場から送出される場合も多い。自動車はモデルチェンジという毎年新しい紛装で多くのコストを必要とすることがアメリカでは指摘されている。容器や包装で高級感を出す商品は内容よりも大きいコストを使っている。生産物の生産に必要な労働量といつても、このなかに欺瞞のコストがひそんでいることはありふれた現象である。

盗るといえばひそかに他人のものを持ち出す、相手をだまして金品を奪う、あるいは暴力でおどかして奪うなどと観念する。これらの犯罪行為は「法律に規定されているような仕方において奪われること」である。盗むとはそうしたことと観念されている。

法には従わねばならないと教えこまれた大衆の心理的盲点として、反射的に法に触れない行為は犯罪ではない、と錯覚する。だから、本質的には窃盗、詐欺、強盗と全く共通の要素をもった行為も法の規定に触れないかぎり「犯罪」といわれても理解できなくなっている。

しかし、自由体制下の売買自由の形のなかで合意的に金を支払

い物を受けとる、という形のなかで、盗み―奪る、奪られる―の関係はあるのだ。それに気がついていない。消費者自身もそれに気がつかないが、企業の側もそうとは意識しない。あるいは、できなくなっている。経済学者も売買のなかに盗奪があるとは認識しない。経済学では交換（売買）や分配はあるが奪る、奪られるの関係を視野にのせたことがない。「分配」「需要供給」「価格」といってもそのなかに暴力と欺瞞が内在している。主観価値学説の効用概念は暴力で脅迫され切迫した欲望や欺瞞によって操作された疑似欲望の心理をもそっくり効用のなかに含んで「効用」とする。客観価値学説である労働価値説も生産に要する労働量の他に欺瞞装置形成の必要労働をも必要労働量としなければ現実の価格を適応的に説明できない。

独禁法の理念にあるように自由、対等、公正な取引においてこそ盗みなき売買は可能であるが、資本主義成立のむかしからそのような対等、公正な取引はなかった。所有の大小、知識の相違、取引環境の不平等条件その他「対等」でも自由でもないものの間の取引が一般的現実であったからだ。

売買は強いものと弱いものとの間で行なわれることから「奪る」「奪られる」が必然となる。競争といっても売る自由のある投資（企業）と、買わない自由のない消費者の間の売買という強弱関係が残る。

強者弱者の間の盗奪関係を意識しない経済学は弱者の異議申立てを認めない。資本主義の体制がそうした異議申立てに対し所有の論理、資本の論理でこれを暴力的に拒否するのと同じペースで経済学もこれを認めない。したがって、経済学の世界に現れるも

のは、異議申立てなき真空の論理にしかすぎない。搾取といったような弱者盗奪も「商品経済的には正も不正もない」という意識形態になってしまっている。経済学の原罪ともいうべきものがこの点にある。

今までのところは主として商品について書いたが、土地、労働、貨幣の取引においても同じように弱者と強者の立場で暴力と欺瞞による盗奪関係によって地代、労賃、利子が決定される。経済学の論理は平坦な滑性面上を走るが、本質は盗奪のジャングルのなかにあるのであって、その盗奪への異議申立てはこれを制度のタブーとして暴力によって、また欺瞞によって封じこめるという前提においてはじめて「原理」「法則」が成立しているといえる。

経済学者が盗奪を意識しなかったところを現実の大衆は異議申立てる。最近もアメリカのハリス世論調査機関のアンケートには「不法に値段をつり上げる商人とコソ泥とどちらが悪いか」の一項目がある。一昨年の三月末に「世直し大集会」が催され一万人が集まった。そこでの小田実のよびかけには「まともなくらしは奪われてしまっている。政府や大企業や大銀行に奪われてしまっている。：：なら、奪いかえせ」。そして、「彼等ハ、ワレラガクラシノ盗ッ人、イヤ、強盗ナノデアル」と叫んだ。

一昨年のオイル・パニックで売手は灯油の価格を不当につり上げたが、これに対して「奪られたものをとり返せ」とマンモス訴訟がおきている。年間の窃盗被害額とほぼ同額が不当なつり上げ価格として盗まれたことに対する返還要求である。さまざまなり返せの行動、運動の気流がみられる状況である。イタリー・ミラノのスーパーマーケットで多勢の客が売場に殺到し、定価の半

値で商品を持ち帰ったという事件があり市民は「市民が独占価格に反抗したのだ」と説明したというが、トリノではバス、ガス、電気、住宅賃の値上げに抗議した大衆が値上げ前の旧料金しか支払わないという運動を始めた。

経済の世界を支配する経済法則というが、経済学の頭のなかに

は基本的な盗奪の視点が欠落している。これが意味することは、経済学によって改革への意欲と行動がもり上がらないということである。経済社会を支配する根源に暴力と欺瞞が大衆の盗奪を行なっているという真実を知ることによって衝動的なおどろきと怒りが喚発され、このことに「盗奪の視点」の重要性が在る。

『アナキズム』バックナンバー

主要目次

九号

特集Ⅱ暴力VS非暴力

『狼』の立場と僕たちの立場 河辺 岸三
非暴力の理念と「摂理の暴力」 福島亀吉
内ゲバを超えるものは…… 森 一蘭
WRIの今日的課題 宮坂 英一
暴力主義の系譜とその批判 奥沢 邦成
南埼玉病院の闘争報告 関 美保子
ある朝鮮人アナキストの伝記(終)

八号

特集Ⅱ天皇制の解体とは

アキツミカミ・ノート 大沢 正道
アナキストと天皇制破壊 大島英三郎
天皇制と教育 辻 文明

諸悪の根源たる殺人狂を裁け! 松井
何が本質か 奥崎謙三

『座談会』天皇制とわれわれのあいだ

良心的軍事費拒否の会 オーノ・ミチオ
アナキズムとテロリズム 江口 幹
キブツとアナキズム ジオラ・メノール
ある朝鮮人アナキストの伝記(四)
クロンシュタット・イズヴエスチャ(四)

七号

特集Ⅱ組織論の変革をめくって

組織にこめられた革命性 石川玄造
現代左翼運動の病相 西田弘和
B・Bと組織をめぐる断想 蓮台寺晋
アナキストと自主管理

『オートジュエスチオン』誌より

△自治権/奪還の里程 南島二朗
地域合同労組運動の形成を 中河 友

六号

特集Ⅱコミュニケーションの再検討

地方自治体論・覚え書き 野本三吉
コミュニケーションへの期待 江口 幹
キブツのことパレスチナのこと 広河隆一
旧料金で電気代を払う会 横倉辰次
戦後アナキズム運動史年表(五)
その他

五号

特集Ⅱ自治管理・労働者評議会

組織にこめられた革命性 石川玄造
現代左翼運動の病相 西田弘和
B・Bと組織をめぐる断想 蓮台寺晋
アナキストと自主管理
四号、三号(特集Ⅱ朝鮮人のアナキズム運動) 定価 各二五〇円
「リベロー」一号(一五〇円)
二号(二〇〇円)

いずれも在庫あり。